

9月13日「真理の声を聴く」ヨハネ福音書8：31～38

今日のヨハネ福音書にはイエスとユダヤ人たちとの対立が描かれています。ヨハネ福音書が書かれたのは紀元90年後半とされていますが、その時代背景には、ユダヤ教がキリスト教を異端としてシナゴグからの追放を決めたヤムニア会議があると考えられます。それまではユダヤ教の一部（ナザレ派）だったキリスト教会は、ユダヤ教との関係を絶たれ、独り立ちしていかなければならなくなりました。また、ローマ帝国との戦争に負けて、神殿を破壊され、ボロボロになったユダヤ教とは対照的にキリスト教会は異邦人に宣教することに成功して、どんどん大きくなっていました。人数が増えることは決して良いことばかりではありません。民族や国境を越えて広がるということは、文化や習慣の異なる人たちが一つの教会に集うということです。当然、異文化同士の衝突もあったでしょう。つまり教会が今でいうところの「グローバル化」を経験していた時代なのです。今日のヨハネ福音書にはこんな言葉がありました。「わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である。あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする。」教会がグローバル化し、様々な価値観が入り乱れ、混乱期にあった教会の中で、真理とは何かを模索した教会の姿勢が伺い知れるかと思います。

私たちも同じようにグローバル化が進み、多様な価値観に溢れる現代を生きています。この2020年はそれらにコロナ禍による混乱を加えることになりました。私たちは真理を必要としています。専門家、学者、政治家、様々な人が声高に色々な見解や知見を述べていますが、どれが真理か見極めることは本当に難しく感じます。一つだけ、例を挙げるなら色々と叫ばれている言葉のなかに「ソーシャルディスタンス（社会的距離）」があります。「感染を避けるためソーシャルディスタンス（社会的距離）を保ちましょう」今ほどこのスーパーやコンビニにも2メートル毎に足型マークがあり、私たちは皆、お行儀よく言いつけを守るわけです。どうやらコロナ禍における「真理」の一つとなっているようです。

ところが、私はずっとこの「ソーシャルディスタンス」に違和感があり

ました。「ソーシャルディスタンス」は日本語にすると「社会的距離」となります。広辞苑によると「集団と集団との間、個人と個人との間における親近感の強度」とあります。つまりお互いの親密性のことなんです。誰もが、困難に陥る可能性がある今私たちはソーシャルディスタンスを広げて疎遠になってはいけません。私たちはお互いに寄り添い合って、支え合って、助け合わなければならないのです！ソーシャルディスタンス（社会的距離）は近づけなければならないはずなのです！多分英語が間違っていて本来は物理的距離（フィジカルディスタンス）を取らないといけないのです。

そして本当に困ったことに流行している言葉の通り、社会の中に格差と分断が生まれ、私たちの間では社会的距離がどんどん開いている現実があります。意図せず感染症を患った人たちが陰湿な嫌がらせに合ったり、仕事を失って経済的に困窮する人たちが大勢現れています。8月の全国の自殺者は昨年より15%も増え、1800人にも上ったそうです。「ソーシャルディスタンス」当たり前に使われているからと言ってその言葉が真理とは限りません。真理を見抜くことは並大抵ではないのです。

今日の日課にはエレミヤ書28章が選ばれていました。28章でエレミヤは偽預言者ハナンヤと対決します。ハナンヤはこんなことを人々に告げました。「**イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。わたしはバビロンの王の轡を打ち砕く。**」バビロン捕囚と言う言葉を聞いたことがあるでしょう。エレミヤの時代、ユダの国は恐ろしい大国バビロニアの脅威にさらされていました。いつ、バビロニアが攻めてくるかわからない、そんな恐怖に国中が怯えるなか、預言者ハナンヤは語ったのです。神さまはユダの国に勝利をもたらされると！ところが、エレミヤは真逆のことを語っていたのです。「**27:6 今やわたしは、これらの国を、すべてわたしの僕バビロンの王ネブカドネツアルの手に与え、野の獣までも彼に与えてさえさせる。**」ユダの国はバビロニアには勝てないから大人しくバビロニアに降伏するようにと語ったのです。皆さんだったらどちらを信じたいでしょうか？当然、人々はハナンヤの預言を喜んで受け入れました。ところが、神さまから遣

わされた本当の預言者はエレミヤだったのです。結局、ユダの国はバビロニアに負けて捕囚されてしまったのです。

加えて、エレミヤが語ったことは人々にあまりにもキツイことでした。「主はこう言われる。バビロンに七十年の時間が満ちたなら、わたしはあなたたちを顧みる。わたしは恵みの約束を果たし、あなたたちをこの地に連れ戻す」70年後？聞いた人は皆思ったでしょう。この預言を聞いた人はほぼ、生きている間には故郷の土を踏むことは出来ないのです。それでも、エレミヤの言葉は人々に希望を与え続けました。たとえ自分は帰れなくとも、自分の子どもやその子どもたちはいつか故郷に帰れるんだ！イスラエルの人々はその日を信じて、厳しい異国での生活を耐え抜いたのです。真理とはそういうものです。そこには厳しい現実があります。でも私達を生かす本当の希望があるのです。

これは牧師にとって本当に誘惑ですが、「すぐにコロナは収束します」とか「絶対に成功します」とか「神を信じる者は病気にかかりません」とか何の根拠も無い希望的観測を神の名と権威のもとに語ることは簡単です。もしかしたらそれは皆さんが望んでいることかもしれません。でも、それは神さまの下に誠実とは言えません。何より、聖書が語ることでもありません。「70年は帰れない」とエレミヤが語ったように神の言葉には恐ろしいほど厳しい現実が含まれていることもあります。私たちの罪の現実が現れることもあります。「ヘブライ書 4:12 **神の言葉は生きており、力を発揮し、どんな両刃の剣よりも鋭く、精神と霊、関節と骨髄とを切り離すほどに刺し通して、心の思いや考えを見分けることができるからです。**」

イエスも今日の福音書で「俺たちはアブラハムの子孫だから特別だ！」そんな選民意識を誇る人たちに伝えます。ユダヤ人だけを神さまが特別視していることではない。聖書が伝えることはどれほど小さく弱い存在も神さまは愛し、決して見捨てることはないということです。

今日選んだ讃美歌「ここにわたしはいます」はそんな大切なことを教えてくれる讃美歌です。もし今、イエスが来られるならば暖かいベッドのある家ではなく、コロナで仕事を無くした路上生活者のところにおられるで

しょう。もし今イエスが来られるならば、競争と争いの勝者の場所ではなく、食べ物と御言葉が分かち合われる場所にでしよう。もし、今イエスが来られるなら私たちはどこに立っているのでしょうか？

究極的にイエスが伝えられた真理も厳しさを備えたものでした。私たちには罪がある。背負いきれない、拭いきれない罪がある。これだけだと立ち行きません。でも続きがあります。それでも私たちには罪と一緒に背負ってくださる方がおられるのです。どうしようもない私たちをとことん愛して、どこまでも赦して、最後には救ってくださる方がおられる！あまりにも厳しい現実とそれを打ち破る神の愛、これに勝る真理はないのです。